

# 靈山淨土觀

遠藤是妙

一、  
婆娑即寂光即身成佛を吾が宗の本旨とすることは、古來周知の定説である。然るに吾が祖の御遺文を拜する時は、師弟俱に靈山淨土を期すると云ふが如き御言葉に接し、忽爾として本宗も亦靈山往生にあらざるなきやを疑はしむるに至る、是れ門下として大に考ふべき重要な依止處であると思ふ。試に祖文の二三を抄せんか、松野殿御返事（一五三）には、

悦ばしからん時も今生の悦びは夢の中の夢、靈山淨土の悦びこそ實の悦びなれと思召し合せて又南無妙法蓮華經と唱へ

九郎太郎殿御返事（一五二）には

靈山淨土へまひらせ給ひたらん時御尋ねあるべし

南條殿女房御返事（一七二八）には

御所勞の人の臨終正念、靈山淨土疑ひなかるべし疑ひなかるべし

又太田殿女房御返事（一八〇九）には

後生には靈山淨土へまひらせ給ふべし

等（光日房書二〇六五）と、何れも未來を期する趣きに拜せられる、隨て未來往生の淨土思想と類似の行方が想像せられるのである、加之草木國土までも悉皆成佛と説く吾宗の教義と甚だ懸隔ある文言にして、宗徒の安心を惑亂せしむる憂なしとしない。乃ち靈山淨土とは如何なる處か、又如何様に領解すべきか、正所依の法華經と他の御遺文との眞意を窺ひ、以て安心の確實を期したいと思ふ。同じ傳道の師にして、甲は現在の受持即成を主張し、乙は未來の往生成佛を説明するとせんか、聽衆甚だ迷はざるを得ない。兩者の何れを正として之に就くべきか、私は嘗て斯かる質疑に答ふべき責任を感じ、且つ平生の信懷を開いて解決の鍵を與へたことがある。今の問題はこの鍵によつて開かれた法藏の一隅にもしかないであらう。

二、

先づ法華經本門壽量品を開いて自我偈の文に至れば

一心欲見佛。不自惜身命時我。及衆僧俱出。靈鷲山我時語衆生。常在此不滅。於阿僧祇劫常在靈鷲山及餘諸住處。我此土安穩。我淨土不毀。

と、佛陀出現常在說法の住處であることは明瞭に拜せられる、靈鷲山は摩竭陀國王舍城に接する第一の高山耆闍崛山で、親しく法華經を説かれたのである、二處三會と稱して虚空會を一處一會とするも、矢張靈山の虚空であるから、宗祖はかの俱出靈鷲山を釋して、靈山一會儼然未散（御義下七）と仰せられて居る。淨土は安穩不毀常住不滅の本土（本佛の所住たる本國土）で、然我實成佛以來と顯本して見れば、伽耶始成釋迦牟尼佛說法の靈山も、其儘本時常寂光の本土となつて、釋尊の肩書に靈山淨土の四字を添加することになつたのであらう、故に法華宗内證佛法血脈（九一七）の始には

久遠質成三身即一釋迦牟尼尊常寂光土靈山淨土唯一教主

と稱せられ、又本門貳體鈔（六八一）には

靈山淨土の釋迦牟尼如來

と云ふ、是は假令後人の僞撰に屬すとすも、前の血脈鈔だけで充分である。

上に擧げたる自我偈の文には、明に靈山淨土とあれども、長行に之を尋ねるときは靈山及び淨土の文なく、反て久遠以來この娑婆世界に在つて說法教化すと宣ふが故に寧ろ本時の同居土と云ふべきである、但し亦餘處に於ても衆生を導利すとあるをば餘の三土（方便實報寂光）と見ることが出来る、是をば偈頌に至つて常に此に住して法を説くことと、又常に靈鷲山（娑婆世界）及び餘の諸の住處（長行の餘處）に在りと頌して居る、娑婆の同居土と雖も、本よ土と見れば常寂光土（遺文九一七）とすべきが本當である。この常住不變の本土こそ、三災四劫に障へられざる安穩不毀の淨土でなければならぬ。是が又本佛の知見に映じたる世界觀なのである、是を長行には如來如實知見三界之相等と六句の知見の謬りなきを明にし、單に娑婆を生滅無常の穢土と見る衆生の見解の正しからざるを簡んで居る。畢竟娑婆世界の靈鷲山を其儘寂光淨土とすることは、本佛の知見と本佛の所在と本佛所説の妙法とによりて、娑婆即寂光の眞相が顯はれ、通一佛土の妙用が示現せらるゝ道理である。本尊鈔（九三九）に今本時娑婆世界離三災出四劫常住淨土と仰せあるもの即ち是れである。

三、

上來法華顯説の壽量品に依て、靈山淨土の眞相を略述したが、法華經を説かれたる靈鷲山を、此の娑婆世界に於け

る寂光淨土に指定せられた様である、然し佛教の頽れたる印度の現状より觀るときは、二十何世紀かを隔てたる、尊い佛陀の靈蹟、而かも當時の宗教的文化を偲ぶべく、餘りに荒れはてた山上の風物として、聊かその名残を留むるに過ぎぬであらう。其れでも佛教徒の經典を信する心より、遙に之を想像し親しく茲に參拜するならば、佛蹟としての眞價に相違はなく、寧ろ勿體なき感さへ起るであらう、是が常住にして滅せざる自然の風光とも云ふべきものである。それは尊い聖者の行蹟として、物質的には破壊變改をよぎなくせらるゝことがあつても、精神的には何うすることも出来ない永遠不滅のものが天地自然と共に残るであらう、其處に法華行道者の憧憬があり、靈山淨土の理想境があると思ふ。

若しこの經説と思想とに謬りなしとせんか、吾人も亦た西方の極樂を願ふ様に、彼の印度の靈山往生を期すべきが如くに思はれる、然し是は釋尊出世の實際的教化の會處に限られた話で、所謂近情の謂ひに比すべきである、吾人は印度出現の釋迦佛に即して久遠の本佛を仰ぐ様に、王舍城外の靈山に即して法界の寂光を期せねばならぬ。壽量品は如來の顯本を正意とするが故に、如來の如實の知見に約して、娑婆即寂光を光顯せられたことは前述の通りである。されば如來の滅後に至つても、法華經を如法に説き如實に行ずる處は、如何なる國土にもあれ、當處靈山に擬し淨土と思はねばならぬ、是を聞日鈔(七九〇)には壽量顯本を述べ來りて

今爾前連門にして十方を淨土と號して此土を穢土と説かれしを打ちかへして、此土は本土なり十方の淨土は垂迹の穢土となる

と述べ、又國家論(二六五)には

爾前淨土久遠實成釋迦如來所現淨土實皆穢土也至壽量品定實淨土時此土即定淨土了

と述べ給ひ、釋尊自ら娑婆世界の靈鷲山に居して、我が身の本事を顯すと共に、所依の國土の全體を安穩の淨土と稱せられたのである。

#### 四、

更に佛身と國土即ち佛陀と世界との關係を考へて見るに、譬喩品の

今此三界皆是我有無中衆生悉是吾子乃唯我一人能爲救護の文及び壽量品の

我此土安穩乃我亦爲世父救諸苦患者

の文は、世界を佛の所有(主徳)となし、其中の人類一切を佛の子(親徳)と思ひ、又一切の教導救濟(師徳)を任となし、其處に切つても切れない因縁關係を明にすると共に、佛は世界の其自體であらねばならぬことを示されてゐるのである。其故に觀普賢經には

釋迦牟尼佛名毘盧遮那遍一切處其佛住處名常寂光

と説き、提婆品には修因得果の廣大無邊なるをば

我見レ釋迦如來乃觀三千大千世界乃無有レ芥子許レ非是菩薩捨身命處乃爲衆生故乃

と説いてゐるので、何れも壽量品に於ける三身常住三世益物を土臺としたもので、所顯の佛身は無始無終無作本覺の三身と稱するものが其である。この本覺の見地から方便品の十如實相を見る時、相性體の三如是宛ら本覺の三身如來となるのである。即ち惣勘文鈔(一八九七)には

此三如是本覺如來乃十方法界爲身法十方法界爲心性報十方法界爲相好身

と述べて、斯ゝる佛の三身を衆生の心中に攝めて、其の本覺を顯すを即身成佛と説くのである、故に衆生皆成を目的

とする佛の大悲願の骨子は、生佛不二の體得にあることは、本より其の處である。其は自ら別問題として以上の經釋より見れば、三千世界の總體を釋尊と拜し（今此三界合文四〇三）、隨て其中に生活する吾等も、生活の資料も乃至一草一木一微塵に至るまで、悉く釋尊の御所領であり財産である（一の谷入道御書一一七八、妙法尼一七七四）と見るべきである、即ち十方世界を佛の身體とすれば、吾々衆生も久遠以來佛の愛子として、（取要鈔一〇三九）始終佛陀の懷に抱かれてゐる道理であり、やがて生長して佛となる確實性を有つてゐるので、吾々の活動は佛の一指一毛の動きであるかも知れぬ、乃至吹く風流るゝ水の音までも佛の梵音聲であるかも知れぬ。東坡の所謂溪聲便是廣長舌山色豈非清淨身と云ふが如きもので、是は一詩人の主觀に過ぎないにしても、佛の知見行者信仰の眼より觀て又當然のことと思はれる、況んや支那にても日本にても、特に法華經を弘通し之を護持したる聖者のあととは、彼の印度の靈山淨土に異らざるものがあると思ふ、但し法華經以外の經論をも合せ傳へたりとせば、其は全然靈山に同じとは云へないであらう、斯くて全世界を本の如く靈山淨土化することが法華本門壽量品の佛意でなければならぬ。

## 五、

吾祖はかゝる本門壽量品に立脚して、開教以來法華色讀の體驗を重ね、遂に木化上行の自覺を確め、専ら靈山別付の妙法五字を弘め、一切衆生成佛三千世界淨化の基礎を身延山に築かれたのである、是れ即ち教主釋尊の靈山淨土と稱すべきもの（南條七郎殿御返事二〇六九）で、其の風光は身延山御書（一二九七）筒御器鈔（一九三九）松野殿女房御返事（一八五九）等に明かである。而して在山九ヶ年の間、吾祖を始め門下の修行せる讀誦唱題の梵音は、恰かも水の大地に滲み透す様に、香の箱に染み付く様に、自然と山中の虚空に溢れ（四條書一九八六）今も猶ほ永遠に其の響を傳へるであらう、即ちたへぬ御法の鶯の山風（一二三〇六）、吹く風もゆるぐ木草も流るゝ水の音までも此の

山には妙法を唱へすと云ふことなし（波木井書二一一三）等と仰せあるものゝ前には自然の告白である、實際の風景である。況んや吾祖碎身の御舍利と不滅の法身とを遺し給へる靈境なるに於てをや、本當に眞の靈山事の寂光土とも稱すべき妙境である。

然らば吾祖の靈山淨土とは、正しく此の處を指すべきか、參れとは此の處に參るべきか、然り此處は其の根本を指し其の中心を示したもので動すべからざることは明かである。日蓮が弟子檀那等は思ひを此處に致して、正に修行を勵むならば、何處に居つても當處常寂光の實土であり、坐らして身延の靈山に來り、一步も行かすして印度の靈山佛を諭し給へるものと拜すべきであり、又吾等の精神界裡佛祖に面奉すべき法悦の心境を物語つたものとも思はれる。若し吾祖にして法華經の爲め大難に値はせ給ふた處は、龍の口であれ佐渡であれ、壽量本佛の證悟に住した寂光淨土と云ふべきである（四條書六八九）吾祖足跡の到る處、門下如法修行の處、皆靈山であり淨土でなければならぬ、（當體義鈔九九一灌頂鈔一〇二九）、隨てこの心から釋尊と法華經等に供養する人は、必ず靈山に參り成佛疑ひなし、即ち靈山往詣と即身成佛とを同様に御使用の處もある所以である。（松野書一七二五、南條書一七二八）

要之天竺の靈山は、その昔世界に於ける淨土の根本であり、身延の靈山は現在に於ける世界淨土の中心である。佛祖は此の現實の世界を離れて、別に淨土を求め給はず、恰も佛祖の靈山は法海に投じたる一石、其の波動の至らぬ限りなきが如く、全世界を靈山淨土化するにある、是を妙法廣布四海歸妙の實現とも、本佛國土の建設とも稱するのである。全體が一佛國一寶土となつて、上に本佛の如き智慧圓滿なる精神的正導を仰ぐならば、決して是れ以上の安心は無いと信する（立正安國論三九一、如說修行鈔九六八）。